



The Japan Association for Language Education and Technology

外国語教育メディア学会

NEWSLETTER No. 97

January 2017

発行 外国語教育メディア学会 (LET) (会長: 柳 善和)

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 尾関修治研究室内

TEL: 052-789-4188 (直通) HP: <http://www.j-let.org/>

就任のご挨拶

LET会長 柳 善和 (名古屋学院大学)

2016年4月から、竹内理前会長の後を引き継ぎ、外国語教育メディア学会(LET)会長に就任いたしました。

LETは50年を超える歴史を持ち、もともとLL機器をはじめとする教育機器の研究、特に教育実践への応用を研究する学会として誕生しました。現在ではその研究の領域は外国語教育学、第2言語習得論にまで及んでいますが、当初の志の中にあつた教育機器の研究はCALLやマルチメディアといった領域を経て、Mobile LearningやGamificationなどさらに新しい領域へと広がっています。これから先どのような研究領域や教育機器、そしてそれらを応用した教育実践が現れるかを想像するのも楽しみです。

さて、2016年度第56回全国研究大会は、8月7日(土)・8日(日)・9日(月)の3日間、関東支部の担当で1年以上の準備のもとに、早稲田大学早稲田キャンパスで開催されました。まずもって、準備にあられた担当の先生方に心より感謝申し上げます。また、会場の早稲田大学ではちょうどオープンキャンパスの日程と重なり、高校生やその保護者の皆さんがたいへんにぎやかにキャンパスを歩き回っていました。LET会場はその一角の建物で開催され、こちらも多くの人で賑わいました。

今年の大会では、基調講演としてDavid Nunan先生が「Language Learning beyond the Classroom」と題して、さらにGlenn Stockwell先生(早稲田大学)が「Technology and the Changing Face of English Language Teaching」と題してご登壇いただきました。また、パネルディスカッションは「協同学習・協働学習の現在と未来: アクティブラーニングの活性化に向けて」と題して、パネリストに、向後秀明先生(文部科学省)、伏野久美子先生(東京経済大学)、大場浩正先生(上越教育大学)、山西博之先生(関西大学)の4氏をお迎えして開催しました。ご登壇の先生方に感謝申し上げます。

また、ワークショップをご担当いただきました先生方、研究発表を披露していただきました先生方、最新の製品・情報を展示していただきました賛助会員の皆様、そしてご参加いただきました先生方、たいへんありがとうございました。

目次

就任のご挨拶.....	1
全国研究大会を終えて.....	3
2016年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿...5	
第56回(2016年度)全国研究大会報告.....	7
2015年度本部事業報告・決算報告.....	28
2016年度本部事業計画・予算.....	30

LETは会員の先生方の研究成果を発表する機会を提供することを、その任務の一つにしています。このような全国研究大会でご発表いただき、質疑応答や意見交換などによってさらに研究が進展することを願ってやみません。

この件に関連して、LETでは機関誌の発行が2年にわたって遅延し、会員の先生方にたいへん迷惑をおかけいたしました。新本部としても深くお詫び申し上げます。機関誌につきましては、第53号を本来予定されていた2016年6月に無事発行することができました。発行を担当していただいた新編集委員長、機関誌編集委員会及び新編集委員会事務局に感謝申し上げます。今後ともぜひ先生方の研究成果をLET機関誌にご投稿下さい。

一方、2017年度の第57回全国研究大会は、8月5日（土）・6日（日）・7日（月）に中部支部の担当で、名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎（名古屋市熱田区）で開催されます。2007年、2011年の2回の全国研究大会を開催した会場ですので、来ていただいた先生方もたくさんいらっしゃると思います。名古屋の夏はたいへん暑いのですが、その暑さに負けないような盛大な研究大会になるように願っております。

毎年の全国研究大会で、年に1回お目にかかる先生方がたくさんいます。そんな先生方とのお話しの花を咲かすのは大いに楽しみです。しかしその一方で、毎年多くの新しい会員の先生方が新しい研究成果を発表していらっしゃいます。ここ数年、若い先生方の台頭が著しく研究全体の構図も急速に発展していると感じます。ぜひ、LETがそのような新しい研究成果に対して発表機会を提供し、それらを取り込んで学会全体の発展につなげることができるように期待しています。

LETに今後ともさらなるご支援をどうぞよろしく願いいたします。

全国研究大会を終えて

大会実行委員長 下山 幸成（東洋学園大学）

第56回の全国研究大会（2016年8月7日～9日）を早稲田大学早稲田キャンパス11号館で盛会のうちに終わることができました。ご参加いただいた各方面のみなさまにお礼申し上げます。初日のワークショップでは15講座で延べ200名を超える方々にご参加いただき、2日目・3日目の講演、研究発表・実践報告、公募シンポジウム、ポスター発表、パネルディスカッションでは約540名の方々にご参加いただくことができました。どうもありがとうございました。

今回の大会テーマは「外国語授業改革：次世代につなぐ授業の形と役割」でした。昨今、外部4技能試験、大学入試新テスト導入、小学校英語の教科化、英語による「英語」授業、反転学習、CLIL、アクティブラーニング、学習指導要領改訂など、教育界では様々な話題がある中で、あえてこのテーマにしたのは、どのような時代であっても授業という人と人が触れ合う場を大切にしたいと考えたからです。現代は、以前から存在していた概念がICTの進歩や時代の要請などから新たな価値を持ち、創造されていく時代です。教室という枠を超え、時や空間を飛び越えて人と人がつながれる時代です。当然、授業の形や役割は従来のままで収まるはずはありません。このような内容を扱うのにふさわしい学会は、まさにLETだと言えるでしょう。本学会こそが新しいものを吟味しながら取り入れ、授業実践に力を入れてきた学会だからです。実践者の勘や経験だけに頼るのではなく理論にも裏付けられた実践、賛助会員の皆様等が作成する教材やシステムにも支えられた実践、そのバランスの良さは本学会の特徴の一つです。

そのテーマに沿った内容としての基調講演、David Nunan先生（Anaheim University）による「Language Learning beyond the Classroom」と、Glenn Stockwell先生（早稲田大学）による「Technology and the Changing Face of English Language Teaching」には、多くの聴衆が集まりました。最後のパネルディスカッションでは、「協同学習・協働学習の現在と未来：アクティブラーニングの活性化に向けて」と題して、向後秀明先生（文部科学省）、伏野久美子先生（東京経済大学）、大場浩正先生（上越教育大学）、山西博之（関西大学）にご登壇いただき、これからの授業に対して現状を踏まえながらその将来的展望についてご討論いただきました。

2日目の懇親会（リーガロイヤルホテル東京）は、150名の方にご参加いただき、こちらも盛会のうちに終わることができました。基調講演者の両氏は参加して下さっただけでなく、懇親会参加者と気さくに記念撮影に応じてくださいました。私もその恩恵にあずかった一人です。大切な1枚になっています。おいしい料理も特筆に値したと思います。

このように大会が成功裏に終わったのは、関東支部の大会実行委員の方々が各担当部署で献身的に動いて下さったからにはほかなりません。合わせて3000通を超えるメールのやり取り、企画の方々の妥協なき細やかな打合せ、ワークショップ担当者の企画立案から実行、査読者の正確さ、プログラムや要項担当者の短期間での集中した作業、設営担当者や受付担当者的の下見や適切な現場判断、会計担当者的の先を読みながら調整する処理、必要なら担当部署を超えてヘルプに入る全体としての動き、例を挙げるときりがありません。改めまして。感謝申し上げます。特に事務局長の奥聡一郎先生と嶋田和成先生には、大会実行委

員長の両腕として、多くの場面で助けていただきました。お二人がいなければ、委員長の仕事を全うすることはできなかったでしょう。

本大会の実行委員長をして改めて思ったことは、人間関係に恵まれているなあ、ということでした。関東支部の会員だけでなく他支部の方々からもねぎらいのお言葉をたくさん頂戴しました。関東支部スタッフに関しては1年以上にわたる大会準備から大会当日、そして事後処理まで含め、動きに申し分ありません。若手が数多く育ってきているのも嬉しいことです。また、大会発表者、参加者、賛助会員の方々、実行委員のメンバーが、様々な場面で話をしている様子を見て、人間同士の温かさを感じることができました。LETという学会に所属していることに対して今まで以上に満足感を得ることができました。

最後になりましたが、初日のワークショップでは都心にあるマンモス大学のオープンキャンパスと重なったため、参加者のみなさま、そして何よりも展示をしてくださった賛助会員のみなさまの搬入に多大なご不便をおかけしました。お詫び申し上げますとともに、ご協力に感謝いたします。

本大会が、参加してくださったみなさまにとって、古き良きものを再認識し、新しき良きものを吸収し、自信を持って日本の外国語教育を次の世代へとつなぐ一助になっておりましたらこの上ない幸せです。ありがとうございました。

2016年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿

論文賞受賞の喜びと感謝の気持ち

江口 朗子（愛知工科大学／名古屋大学大学院生）

2016年度外国語教育メディア学会の学会賞（論文賞）という大変荣誉ある賞を賜り誠にありがとうございました。学会の役員の方をはじめ、論文の査読をして下さった先生方、選考委員の先生方、LET機関誌編集委員会の先生方に心より感謝とお礼を申し上げます。

この論文“The Relationship Between L2 Listening Comprehension and Phonological Short-term Memory with a Focus on Sentential Knowledge”（LET機関誌第52号掲載）は、私が名古屋大学大学院博士後期課程2年生の時に授業で取り組んだプロジェクトがもとになっています。L2リスニングと音韻短期記憶の関連性を調査した1本の論文に出会ってから論文投稿までの約1年間に、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。ここにお名前を挙げて感謝の意を表したいと思います。

名古屋大学の村尾玲美先生には、授業を通して研究プロジェクトの機会を与えて頂きました。その後、修正版をLET中部支部研究大会で口頭発表、さらに、拡張版を論文執筆してLET機関誌に投稿するまでの間、ずっと温かく見守りご指導下さいました。授業で初めて出会った前期課程1年生の平井浩子さん、山田貴将さん、研究生の張紅旭さんと一緒に、Call (1985) をもとに研究課題の設定、実験材料の作成、実験協力者の募集、データ収集、分析、発表までを3か月間で行いました。共同で行うプロジェクトをまとめるのは初めての経験で、難しさを感じることもありましたが、計画段階では村尾先生に助言を頂きながらみんなで議論を重ね、実施段階では報告を密にすることでグループ内での意識の共有を図り充実した気持ちで発表を終えました。

木下徹先生には、統計について何度も丁寧にご指導頂き、そのおかげで先行研究の統計手法について理解が深まり自分の統計処理にも自信を持つことができました。この受賞論文の統計に関する記述も、時間を惜しまずチェックして下さいました。

岐阜女子短期大学の小島ますみ先生からは、LET中部での口頭発表で貴重な質問を頂きました。それを機に一念発起し、文献を読みあさって研究課題を再考しデータの追加収集・再分析を試みました。その後もメールでやり取りさせて頂く度に研究が進みました。

最後になりましたが、指導教員である名古屋大学の杉浦正利先生には、ゼミ発表させて頂き、投稿前には丁寧に論文を読んでご指導頂きました。そして何よりも、日頃から授業や博士論文指導を通して、先行研究レビューに基づく研究課題の立案、実験のデザイン、論文執筆の心構えといった研究のエッセンスを伝授して下さいました。それが今回学会賞を頂いた論文に反映できたと思います。

私は大学教員になる前には、長い間小中学生の英語学習に関わってきました。まだ文字も読めず単語力も少なく文法の明示的知識もない子どももある程度長いまとまりのある英語を聞いて理解できるようになります。なぜでしょうか。L2リスニングに関わるこのような不思議の謎解きは、私がいつかやってみたい研究リストの常に上位にありました。今回の論文はそのほんの一部分を明らかにしたにすぎません。選考委員会の先生方からは「今後の継続的な研究成果も大いに期待できる」というお言葉を頂戴し、今後の私の研究活動や

教育活動への大きな励みとなりました。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

学会賞受賞の喜び

石井 雄隆（早稲田大学大学総合研究センター）

この度、2016年度外国語教育メディア学会新人奨励賞を賜りましたことを心より感謝致します。会長の柳善和先生、本部事務局長の尾関修治先生、中部支部支部長の高橋美由紀先生、学会賞選考委員の先生方、私を推薦して下さった先生方に深く御礼申し上げます。

偶然にも私が学部・大学院そして教員になるまで10年を過ごした早稲田大学で行われる全国大会の会場でこのような素晴らしい賞をいただけることができ、大変感激しております。また、これまで私が取り組んできたライティングの自動評価などデータマイニングを活用した一連の英語ライティングに関する研究と早稲田大学における高等教育開発の取り組みを評価して頂き、とても嬉しく思っております。

近年の教育を巡る状況は、大きく変わりつつあります。私も現在の勤務先において、全学向け統計教育プログラムやアクティブラーニングマニュアルの開発・Massive Open Online Courses (MOOC)のコース開発やデータ解析・ワシントン大学とのFaculty Development (FD)に関する国際共同研究・Institutional Research (IR)など様々な高等教育開発に関わりながら、外国語教育研究者としてより良い教育のあり方について日々模索しております。

私はこの外国語教育メディア学会を通して、多くの研究者と知り合うことが出来ました。そして、研究が上手く行かず、悩んでいた時に励まして頂いたことや、研究を続けるかどうか悩んでいた時に相談に乗って頂いたことなど、たくさんの先生方に支えていただきました。そういったたくさんの出会いに感謝しながら、これからも研究を続けていきたいと思っております。

また、学部生の頃からの友人である静岡県立大学の福田純也先生や広島大学の草薙邦広先生をはじめとする中部支部の若手研究者の皆さんとは、夜遅くまで自分の研究について語り合い、その研究への思いを共有してきました。時を経て、私達も教員となり、今までのように自分の研究の話ばかりではなく、外国語教育はどうあるべきか、あるいは学会とはどうあるべきかといったことについて話し合うことが増えるようになりました。

今後は、外国語教育メディア学会でお受けした恩を外国語教育メディア学会、ひいては社会に還元していけるように、微力ながらお力添えさせて頂ければと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第56回（2016年度）全国研究大会報告

外国語教育メディア学会・第56回全国研究大会は2016年8月7日から9日まで、早稲田大学早稲田キャンパス11号館で開催されました。大会の報告を以下にまとめました。

概要：

開催日	2016年8月7日（日）-9日（火）
会場	早稲田大学 早稲田キャンパス11号館
入場者	740名
主催	外国語教育メディア学会（LET）
会長	柳 善和
大会会長	下山 幸成
後援	文部科学省・東京都教育委員会
実施内容	下記の通り

8月7日（日）

各種会議・ワークショップ

8月8日（月）

基調講演：

Language Learning beyond the Classroom

Dr. David Nunan (University of Hong Kong; Anaheim University)

研究発表・実践報告、公募シンポジウム、賛助会員プレゼンテーション、企業展示、学会賞表彰、総会ほか

8月9日（火）

基調講演：

Technology and the Changing Face of English Language Teaching

Dr. Glenn Stockwell (早稲田大学)

パネルディスカッション：

協同学習・協働学習の現在と未来：アクティブラーニングの活性化に向けて

司会：今野 勝幸（静岡理科大学）

パネリスト：向後 秀明（文部科学省）、伏野 久美子（東京経済大学）、大場 浩正（上越教育大学）、山西 博之（関西大学）

研究発表・実践報告、公募シンポジウム、賛助会員プレゼンテーション、ポスター発表、企業展示、ほか

8月7日（日）：第1日

各種委員会・支部長連絡会・理事会

ワークショップ

12:30-14:00

「Kahoot & Zaption: 教材・授業をさらにインタラクティブに」

山内 真理（千葉商科大学）

「エデュケーショナル・データマイニング入門—教育改善・意思決定のためのデータ活用—」

石井 雄隆（早稲田大学）

「『リピート・アフター・ミー』で導入しない新出単語の発音」

手島 良（武蔵高等学校・中学校）

「授業改革のための第一歩：繰り返しを意識した定着活動」

白倉 美里（東京学芸大学）

「小学校英語：電子ボードとタブレット端末を使うと授業の何が変わるのか」

久埜 百合（中部学院大学学事顧問）

14:20-15:50

「タブレットを用いて授業改革！—導入からアプリ活用法まで—」

小野 雄一（筑波大学）

「外国語学習・教育・授業の研究「方法論」入門—量的研究と非量的研究—」

寺沢 拓敬（関西学院大学）

「小学校で行う英語音韻認識指導」

ハビック 真由香（MH International Education）

「セグメンタルにこだわりセグメンタルを超える発音指導—次世代につなぐグルグル授業の形と役割—」

静 哲人（大東文化大学）

「英語授業での協同学習をどう進め、効果を高めるか—すべての生徒の学び実現に向けて—」

根岸 恒雄（群馬県立女子大学・千葉商科大学非常勤講師）

16:10-17:40

「TEDプレゼンなど、ウェブから取り込んだ好みの字幕付き映像で4技能（聴解読解発音作文）を授業内外で学習する試み」

田淵 龍二（ミント音声教育研究所）

「量的データを扱うときに知っておきたいこと：データの分布、有意性、効果量、信頼区間」

浦野 研（北海学園大学）

「『繰り返し』『定着』を狙った授業づくり—ラウンド制授業の取組—」

西村 秀之（横浜市教育委員会・元横浜市立南高等学校）

「ICTを活用するとこんな授業ができます！—21世紀型の英語授業の形と役割—」

瀧沢 広人（埼玉県寄居町立寄居中学校）

8月8日（月）：第2日

開会行事

司会：奥 聡一郎

会長挨拶：柳 善和

大会実行委員長挨拶：下山 幸成

総会・学会賞授与式

司会：尾関 修治

会長挨拶：柳 善和

基調講演

Language Learning beyond the Classroom

Dr. David Nunan (University of Hong Kong; Anaheim University)

今回の講演では「教室外で行う言語学習」の有用性が説かれました。教室外での語学学習では「冒険的な環境」を作り出すことができ、学習者はより活動的で自律的に語学学習に携わることができるとし、以下の5つのケース・スタディが紹介されました。

ケース・スタディ 1：交流課題

留学した学生が現地の人にインタビューを行い、その内容を大学のウェブサイトに掲載するという実例が紹介されました。自信が付き、言語が流暢になり、文化的感受性も身につけられたことが報告されました。

ケース・スタディ 2：電子メール・タンDEM学習

お互いに相手の言語を学んでいる2人の学生をペアにしてメール交換を行わせ、相互に第二言語学習の恩恵を受けるという実例が紹介されました。協調学習を通じて、言語スキル、文化理解、自律学習、メタ言語認識などが増したことが報告されました。

ケース・スタディ 3：語学交換ウェブサイトインターネット上で語学交換を行う実例が紹介されました。目標言語で書き込みを行い、フィードバックを受けるといった活動で、学習者は全般的に積極的な経験をすることができたとの説明がなされました。

ケース・スタディ 4：教員指導の課外プロジェクト

午前中は教員が指導するクラスで学習し、午後は市街に出てインタビューを行い、最終的にその成果をウェブサイトで発表するというプロジェクトが紹介されました。学習者は言語学習に対する主体性を身につけ、困難に立ち向かう精神も学んだことが報告されました。

ケース・スタディ 5：学習者主導の課外プロジェクト

学生主導でドキュメンタリーを企画・撮影し、目標言語で YouTube に投稿するプロジェクトが紹介されました。学習者は協同学習を通じて、クラスで学んだ内容を課外活動に結びつけ、自律学習ができるようになったとのことでした。

今回の講演で紹介された5つのケース・スタディでは、言語学習には教室外活動が有用であるということが報告され、コミュニケーション力、自信、動機づけ、人格的成長、異文化認識、自律学習などが促進されたとの説明がなされました。

【報告：萱 忠義（学習院女子大学）】

公募シンポジウム

「多様な大学環境における英語eラーニング—これまでの実践を振り返って—」

青木 信之（広島市立大学）・鈴木 繁夫（名古屋大学）・竹井 光子（広島修道大学）・渡辺 智恵（広島市立大学）・志水 俊広（九

州大学)・寺嶋 健史(松山大学)・池上 真人(松山大学)

本公募シンポジウムの発表者らは、それぞれが所属する大学において、同一の英語eラーニングシステムを用い、その学習効果やラーニングマネジメントのあり方について9年以上にわたり共同研究を進めている。この英語eラーニングシステムは、8週間から15週間、リーディング、リスニング、文法問題を大量に学習するドリル型の英語学習システムであるが、その導入形態や授業形態は各大学でさまざまに異なっている。

本公募シンポジウムではまず、これまでの共同研究により、eラーニングを利用した英語学習で測定してきた学習効果について言及するとともに、①eラーニングを利用した英語学習においては、「質」を伴った学習をさせることが重要であること、②学習に効果を持たせるには、「質」を伴った「量」を確保することが重要であること、③学習の「質」「量」はマネジメント(管理)によって担保することが可能であるというまとめの報告を行った。

その上で、共同研究に参加している各大学での実践形態や学習管理の方法、評価の方法、学習の量・質・継続性の確保のための工夫、不適切学習防止に向けた取組み、不正行為防止のためのアイデアなど、各大学でのこれまでの実践を振り返りつつ、英語eラーニングが抱える現在および今後の課題について報告および議論した。

【報告：青木 信之(広島市立大学)】

「ICTを活用した小学校英語教育—スカイプを使用した事例研究を基に—」

高橋 美由紀(愛知教育大学)・大野 直子(グローバル・コミュニケーション&テストイングリッシュ)・松田 孝(小金井市立前原小学校)

ICTを活用した英語教育についての理論から、コミュニケーション能力育成にはスカ

イプの活用が効果的であることを述べた。次に、A小学校でALTとのSkypeを活用した授業の事例研究として、(1)平成23年10月より一人一台のタブレット端末を活用した教育実践を積極的に推進しており、校内Wi-Fiも整備されていたため、Skypeによる英語活動導入におけるインフラが整っていたこと、(2)ベストティーチャーとの年間11回のSkypeを活用した英語活動の導入となったこと、(3)授業は、導入15分、展開15分、まとめ15分で、導入では本時で学ぶ単語をインプットし、ネイティブとの会話に向けてフレーズの練習を行ったこと、(4)その後、実際にSkypeを活用して一グループ3~4人で一人のネイティブとコミュニケーションを図ったこと、(5)実際の会話時間は15分で、ネイティブとのコミュニケーションを積極的に行えるようゲームの要素を取り入れ、事前に配布したプリントに会話内容を数字などで書き込むよう工夫したこと等の内容とALTによる授業と異なり、ネイティブ講師とのマンツーマンの授業だったため児童の発話機会も多くなったこと、講師も目の前の生徒に合わせて授業を行えたことにより英会話へのモチベーションが高まったこと、さらに、指導者が臆することなく新しいTechnologyを積極的に活用することで、児童は自ら学ぶ姿勢を示す。タブレット、Skypeというtechnologyが児童の学びのassistive & adaptive technologyとなった好例であったこと、さらに、その成果をTOEFL Primary®で評価した結果について発表した。

フロアからは、児童の日常生活に必要な不可欠であるICTを今後の小学校英語でもっと活かすべきだとの意見や、多様な児童の学習にはICT活用が効果的であるとの意見もあった。

【報告：高橋 美由紀(愛知教育大学)】

「TEDプレゼンや英語落語などの映像と字

幕を使用して読解、聴解、発音指導を効果的に行うICT授業実践」

田淵 龍二（ミント音声教育研究所）・山口高領（早稲田大学）・大山 健一（首都大学東京）・神田 明延（首都大学東京）・鬼頭和也（東海大学）・久保 岳夫（早稲田実業学校）・湯舟 英一（東洋大学）・中條 清美（日本大学）

今回のシンポジウムでは、ICTによる字幕の新しい使い方を通して、これからの授業がどのように変わるのかを示せたと考えている。前期を終えた段階で授業担当者と同面談を行った。授業での字幕利用については、「学習上欠かせないもの」、「音声を理解するための手がかり」、「自分で字幕を作った大変さがわかった」、「学習者のリスニングの不安を解消してくれる」と重要さに触れていた反面、「自転車の補助輪と同じで、いずれはいらなくなるのが望ましい」との意見も聞かれた。表示されるだけの字幕から、機能を持つ字幕の時代が始まっており、字幕に対する考え方が多様化し変化していくであろう。従来から行われてきた訳読授業に慣れた教員にとっては、最初から英語や日本語の字幕が表示されていると戸惑ってしまうのかもしれない。しかし、他方では授業の最初に英文や訳文のプリントを配布する教員も見受けられていた。生徒が能動的に授業に参加する手段あるいは道具として字幕、特に表示／非表示が自在で、そこから文字情報を取得するだけでなく、字幕部分だけの音映像を取得できる機能的字幕は、授業運営に不可欠なツールとなるかもしれない。字幕があることで英文の意味の説明に時間を取られることなく課題に入れ、授業のテンポがよくなり、授業内での反復練習が増えた効果は、生徒の側からも指摘されている。アンケートには、「リスニングやスピーキングの勉強にもなり、英語の文を聴いたり話したりするので、テストになった時には全文を暗記できてい

るほどになっていた。」と書いた者がいた。また字幕を使ったチャック提示法については「英語の発音でわからなかったところだけを繰り返し流せたり、スピード調整ができるのでネイティブの発音練習がしやすい」という声に集約されているようだ。個人が抱えている課題を自律的に解決するひとつの重要な要件がここに示されていると言えよう。

【報告：田淵 龍二（ミント音声教育研究所）】

「外国語教育における多変量解析の諸問題：よりよい質問紙研究を目指して」

草薙邦広（広島大学）・徳岡大（高松大学）・川口勇作（名古屋大学大学院生）

本シンポジウムのテーマは、外国語教育における多変量解析についてであり、これまでの当該の手法の概論、および最新の分析技術などについて報告がなされた。

まず、草薙邦広（広島大学）は、これまでの外国語教育研究の歴史を統計手法の観点から展望し、また、近年、多変量解析手法が高度化している現状について紹介した。その後、潜在変数モデル（latent variable models）および形成モデル／反映モデルの区別についての概略を述べ、適切な多変量解析のモデリングやその解釈についての指針を会場と共有した。

その後、川口勇作（名古屋大学大学院）は、質問紙研究の実践性という観点から、他の学術的領域の実践例を紹介しつつ、望ましい尺度作成、尺度の妥当化、尺度使用についての手順を具体的に示した。

心理学の研究者である徳岡大（高松大学）は、データ構造を活かした分析手法という観点から、潜在曲線モデル、階層モデル、そして欠損値の取扱いについて最新の研究手法を紹介した。

総括として、草薙邦広が登壇し、手法上の洗練はもちろん重要なことではあるが、分

析対象である学習者、学習者の言語活動、そして教育環境などに関する実質的な知見への理解が重要であることを再確認した。

発表後には、統計手法上の技術的な問題をはじめとして、さまざまな点について活発にフロアとのやりとりがなされた。質疑の対象となった事柄は、(a) 心理学分野における尺度作成、尺度運用、そして統計モデリングの実際、(b) 構造方程式モデリングにおけるモデル選択と適合度指標の報告及びその解釈、(c) 欠損データの取扱に係る倫理的な配慮などについてであった。

【報告：草薙邦広（広島大学）】

研究発表・実践報告

〔実践報告〕

「スマートフォン用英語語彙学習アプリLanternの開発および高校英語中級学習者への指導」

桑原 市郎（柏市立柏高等学校）・高橋 秀夫（千葉大学）・中村 亮太（電源開発株式会社）

環境的・時間的理由でほとんど活用されない高校生向け教材の音声素材を、スマートフォンを用いた単語学習アプリを作成し（Lanternと命名）、そのアプリ上で学習者に身近な形で提供した。その結果、学習時間の増加が見られ、その利便性が高いことが示された。著作権への配慮のポイントや高校校内の使用をめぐる工夫など、質疑も含めて活発な議論がなされた。参加者数24名。

【報告：荒木 瑞夫（宮崎大学）】

〔実践報告〕

「チャンク表示を用いたCALLシステムの構築およびTOEIC読解学習履歴の分析」

田辺 誠（宇部工業高等専門学校）・道本 祐子（宇部工業高等専門学校）

英文素材を自動的にチャンク分けした上で、戻り読みをしないようにリーディングを練習するツールを、ブラウザ上で操作できる形で作成した。語注も含めた教材作成や、学習者行動のモニターもできる。授業で使用し、ツールの評価を行ったところ、読解の伸びは個人差も大きかったが、全体的な伸びが見られた。アンケートから今後の開発の示唆が得られた。発表後、活発な質疑応答がなされた。参加者数29名。

【報告：荒木 瑞夫（宮崎大学）】

〔実践報告〕

「リメディアル教育用コーパスSCoREを使ったデータ駆動型学習の実践」

中條 清美（日本大学）・西垣 知佳子（千葉大学）

リメディアル・レベルの大学生向けのData-Driven Learning (DDL)を行うべく、10、113文からなる教育用コーパスSCoREを作成した。SCoREはWeb上で提供され、語句のみならず文法項目や英語レベルも検索に含めることができ、適語補充問題も備える。授業後のアンケート等より、リメディアル教育におけるアクティブ・ラーニングの一方法として有効であることが示された。発表後、活発な質疑応答がなされた。参加者数33名。

【報告：荒木 瑞夫（宮崎大学）】

〔実践報告〕

「書くことを日常化する100ワードエッセイ活動」

寺田 恵理（早稲田大学 大学院生）・保崎 則雄（早稲田大学）

本発表は、(1) 英語アカデミックライティングの授業課題「100ワードエッセイ活動」の効果と(2) その活動後の学生の意識（「『書く』ということ日本語、英語を問わずどのように考えるか」）について

明らかにするのが目的の発表であった。第二言語での継続的なライティングが重要で、効果があると考察されている。学生へは英文のerror correctionは行わず、内容を深めるようなフィードバックが行われた。その結果として、出された課題量を80%の受講学生が完了し、深い学びに至った学生も見られるようになった。参加者数29名。

【報告：竹野 茂（宮崎公立大学）】

〔実践報告〕

「発信型グループプロジェクトの実施―「メディア英語」への取り組み―

中田 ひとみ（獨協大学）

本発表は授業における発信型タスクの実践報告であった。1学期の前半はインプット学習にあて、後半の7～8周を（1）スキット（動画）作成、（2）新聞記事の作成、（3）インタビューを含むニュース番組制作をグループプロジェクトとして課した。グループは4～5名で編成。音声指導はしておらず、今後の指導の必要性も示された。学生自身が情報の発信者となった英語での作品制作を通して、実社会の疑似体験をできたこと、協働学習への連動が期待できることを挙げられていた。参加者数30名。

【報告：竹野 茂（宮崎公立大学）】

〔実践報告〕

「特定のeラーニング・プラットフォームに依存しない問題作成システムの開発」

大澤真也（広島修道大学）・大西昭夫（株式会社VERSION2）・田中洋也（北海学園大学）・浦野研（北海学園大学）

本発表はMoodleなどのLMSに依存しない問題作成システムを紹介したもので、多肢選択、記述、穴埋め、並べ替えの4種類の問題形式に対応し、csv形式で作成した問題をサーバにアップロードして利用するものである。メリットとしてオフラインで、

作成した問題の参照、修正、追加ができ、教員間で同一の問題を共有できることがあげられる。また、学生のユーザ登録も簡単である。問題作成時の登録コード入力によりクラスに自動的に割り振られ問題が解ける。教員は学生の回答と成績をcsvファイルでダウンロードできるのも特徴である。参加者数30名。

【報告：竹野 茂（宮崎公立大学）】

〔実践報告〕

「英語専攻の大学生に対する発音矯正指導」

有本 純（関西国際大学）・河内山 真理（関西国際大学）

発音矯正指導の難易度について、大学生を対象に行った指導の結果より、指導が容易および困難な項目、矯正効果の少ない項目がそれぞれ示された。困難な項目としては、イントネーションの上昇調、語末の/t/の脱落、/v/の発音などが挙げられた。この結果を踏まえて、指導順序、方法の提案も行われた。参加者39名。

【報告：藤永 史尚（近畿大学）】

〔実践報告〕

「Chromeの音声合成・認識を使用したWEB上の英語教材の開発」

風斗 博之（東北学院大学）

Google Chrome上で動作する音声合成・認識機能（Web Speech API）を利用したWeb教材についての発表であった。事例として、音声提示された質問に口頭で応答させて正誤を自動判定する教材などの紹介も行われた。この機能は英語以外にも対応しており、幅広い活用が期待される。参加者40名。

【報告：藤永 史尚（近畿大学）】

〔実践報告〕

Implementing Mobile-Assisted Language Learning in Japan

Obari, Hiroyuki (Aoyama Gakuin University), Sato, Takeshi (Tokyo University of Agriculture and Technology)

モバイル機器（スマートフォンなど）でSNSなどを利用した学習活動を、教室での学習と組み合わせる効果についての発表であった。実践事例の結果から、このような学習形態によって教室内外での学習者同士の交流が促され、リスニングやスピーキング技能も含めた英語能力、学習への動機付けが高まったことが示された。参加者26名。

【報告：藤永 史尚（近畿大学）】

〔研究発表〕

Which CBI on ELT Works Better, Active Learning or More Demanding Lectures?

Miyasako, Nobuyoshi (University of Teacher Education Fukuoka)

英語教育の授業におけるアクティブラーニングの効果が伝統的学習との比較で検証された。効果、好意的受け止め、動機づけの観点について質問紙調査が行われ、幾つかの点に有意差が出た。アクティブラーニングは伝統的学習に比べて効果があり、より好意的に受け止められ、動機づけを高めるとの結論になった。発表は全て英語で行われた。参加者数11名。

【報告：橋本 健広（関東学院大学）】

〔研究発表〕

「タイトル：ALT主導の授業とデジタル英語教材による授業の組み合わせ効果—6年生のリスニング力に焦点を当てて—」

長谷川 修治（植草学園大学）

発表者が独自に開発した小学校6年生向けのリスニングのデジタル英語教材を、ALT

主導の授業と合計10回組み合わせた場合の効果の検証がなされた。事前・事後テストから、クラス全体、上位群、下位群の間で有意差が見られた。デジタル英語教材とALT主導授業の組み合わせはリスニング力の向上に、特に下位群に有効であることが示唆された。

【報告：橋本 健広（関東学院大学）】

〔研究発表〕

「英語学術論文執筆支援ツールAWSuMの開発と教育への適用に向けた課題検討」

水本 篤（関西大学）・浜谷 佐和子（関西大学大学院生）・大西 昭夫（VERSION2）

英語学術論文執筆支援ツールAWSuMの学術的背景、開発経緯、ユーザーからのフィードバック、および今後の教育適用に向けた課題が検討された。応用言語学分野における1000論文からムーブを抽出したコーパスを作成し、頻度の高い語連鎖を表示するアプリケーションが開発された。今後はコンピューターサイエンス等の分野での開発を行うとのことである。

【報告：橋本 健広（関東学院大学）】

〔実践報告〕

「英語クラスで実施したTEDスタイルプレゼンテーション—学生のアクティブラーニングと振り返り—」

塩見 佳代子（立命館大学）

本発表は、今、注目を集めているTEDスタイルを踏襲したプレゼンテーション教育の実践に関する報告であった。発表者自身、TEDxKyotoのキュレーターとして活躍していることもあり、スライドの作成方法、デリバリーの方法等、プレゼンテーションにおいて重要な様々なポイントを学生自身楽しんで学習していることが見て取れた。参加者数35名。

【報告：長 加奈子（福岡大学）】

〔実践報告〕

「映画の中の絵本を題材とした授業実践報告—I am Samの中のGreen Eggs and Ham—」

松田 早恵 (摂南大学)

最近、英語だけでなく、学習者の母語である日本語においても「読むこと」に抵抗がある学生が多い。本発表は、そのような学習者に対し、アメリカの識字教育にも重要な役割を担っているドクター・スースの絵本とそれらの絵本が登場する映画を用いて、どのように読む楽しさを伝えることができるかという観点から授業の実践報告が行われた。参加者数23名。

【報告：長 加奈子 (福岡大学)】

〔実践報告〕

「EGP文脈でのアクションリサーチによる職業高校でのアクティブラーニングの受容」

高橋 昌由 (津山工業高等専門学校)

英語に対する苦手意識が高い職業高校（農業高校）の3年生を対象に対して、一般的な英語読解教材を用いてアクティブラーニングを行い、その生徒達がアクティブラーニングをどのように受け止めているかについて行った質問紙調査の結果が報告された。聴衆の関心も高く、大変活発な議論が行われた。参加者数20名。

【報告：長 加奈子 (福岡大学)】

〔研究発表〕

「工学系英語学術論文の文法的特徴について一分詞の使用を中心に—」

奥山 慶洋 (茨城工業高等専門学校)

約12万語のコーパス(発表者作成)を用いて工学系英語学術論文における懸垂分詞(Dangling participle)の用例を分析しその特徴についての考察がなされた。工学系英語学術論文においては共起する動詞によつ

て懸垂分詞の出現度が変化し、ネイティブによる論文にも誤用が含まれており、その実情も考慮した学習者への指導が重要であることが報告された。参加者数17名。

【報告：柿元 悦子 (九州産業大学)】

〔研究発表〕

「第二言語のスピーキングパフォーマンスにおけるネットワーク構造とダイナミクス：学習者コーパスを用いて」

西村 嘉人 (名古屋大学大学院生)・福田 純也 (静岡県立大学)・田村 祐 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

学習者の口頭産出パフォーマンスを測定・評価する構成概念とされる複雑さ・正確さ・流暢さ(CAF)が熟達度とともにいかに変容するか、ネットワーク分析を用いて記述しようとした研究。CAFを個々の要素としてではなく、一つのシステムと捉えるネットワーク分析の有用性を提示した。発表後には活発な質疑応答のため時間が不足するほどであった。参加者数34名。

【報告：柿元 悦子 (九州産業大学)】

〔研究発表〕

Implementation of Peer-review in Project-based English Program: The Effects of Peer-review Process on Students' Writing

Tsuji, Kayo (Ritsumeikan University)

ピア・レビューの過程の学びを通してライティング効果の向上を試みた実践研究。大学生49名を被験者としてプロジェクト型英語授業内でピア・レビューアクティビティーを実施。学生が行った課題英文を評価者2名が評価し、その効果を検証。結果、ピア・レビューの過程の学びを行った事後の方がライティング効果の向上が見られたことが報告された。参加人数19名。

【報告：深田 将揮 (畿央大学)】

〔研究発表〕

「ライティングにおける母語干渉に関する一考察—同一日本語文に対する語句整序問題と翻訳問題の解答分析を資料として—」

橋尾 晋平 (同志社大学大学院生)

語句整序問題の演習は、母語干渉を克服する上で有効かどうかを明らかにした研究。私立高等学校2校、各20名を被験者として研究を実施。結果、語句整序問題が英語の語順を習得する上で重要であるが、母語干渉を完全に克服するための学習方法とは言い難いという内容が報告された。参加人数27名。

【報告：深田 将揮 (畿央大学)】

〔実践報告〕

「アクティブラーニングを促す英語リスニング・スピーキング指導」

下山 幸成 (東洋学園大学)

英語を話す抵抗感が大きい学習者を対象に、「動画」を活用した協働学習及び、リスニング活動を通して、アクティブラーニング力とスピーキング力を向上させる指導内容について、学生のアンケート結果等も踏まえて示唆された。参加者からは「実証的な研究」ではないのか？という質問が出たが、非常勤先なのでデータがとれないといった実情が話された。参加人数95名。

【報告：高橋 美由紀 (愛知教育大学)】

〔実践報告〕

「言語文化学習用マルチメディア教材を提供するコースウェアとしてのiTunes UniversityとMoodleとの比較」

野澤 和典 (立命館大学)

言語文化学習の教材として、個人的なプロジェクトで構築したiTunes Uのコースと学部のCALL授業や大学院講義サイトとして利用しているMoodleを設定、コンテンツ

構築、ツール、利用方法などについてそれぞれの利点と欠点を考察した。カリキュラムへの導入方法や機器 (モバイル) 等の具体的な使用方法についての質問が多かった。参加者数47名。

【報告：高橋 美由紀 (愛知教育大学)】

〔実践報告〕

「アカデミックプレゼンテーション表現学習のためのスマホ対応ウェブアプリ教材の開発」

古泉 隆 (名古屋大学)・石田 知美 (名古屋大学)・松原 緑 (名古屋大学)・小松 政宏 (名古屋大学)・杉浦 正利 (名古屋大学)

アカデミックプレゼンテーション学習用のeラーニング教材 (eFACE) について、同僚の教員らが作成したオリジナル素材によるプレゼンテーション動画を基にして、スマホでもPCでも学習できるウェブアプリを開発したことについて具体的な内容に関する発表であった。教材のリソースなどに関する質問が多かった。参加者数36名。

【報告：高橋 美由紀 (愛知教育大学)】

〔実践報告〕

「リンデンホールスクール中高学部におけるバカロレア教育と進路指導の実践報告—2015年度高等部卒業1期生を例に—」

深津 勇仁 (福岡女子大学)

本発表は、福岡県筑紫野市にある一条校、リンデンホールスクール中高学部第一期卒業生に対するバカロレア教育の成果と彼らの卒業後の進路に関する報告であった。ディプロマ試験の詳細や結果について詳細に報告された。質疑では、運営資金、検定教科書の使用、指導可能な教員の確保などに関する質問があった。参加者数17名。

【報告：天野 修一 (静岡大学)】

〔研究発表〕

「小学校英語活動に関する意識の違い教員、ALT、管理職、指導主事を対象とした聞き取り調査より」

池田 真生子（関西大学）・今井 裕之（関西大学）・竹内 理（関西大学）

本発表は、教員、ALT、管理職、指導主事という立場の異なる4者の小学校英語教育の目的、内容、授業の運営方法などに関する意識の違いをインタビュー調査したものであった。チームティーチングや指導上の不安点について認識の違いがみられた。質疑では、ALTの雇用形態やALTが抱える不安の要因に関する質問があった。参加者数61名。

【報告：天野 修一（静岡大学）】

〔研究発表〕

「fNIRSにおける異なる韻律条件の英文聴解時の脳活動の観察：母語話者と日本人学習者の脳賦活度の比較」

梶浦 真由美（名古屋大学大学院生）・木下 徹（名古屋大学）・松村 優子（近畿大学）・原田 洋子（大阪府立大学）・松田 紀子（大阪工業大学）

本発表は、異なる韻律条件における英語母語話者と日本人EFL学習者の脳活動を比較検討したものであった。結果として、学習者は母語話者とは異なり、韻律の有無が脳活動に影響を与えておらず、英語聴解時に韻律をそれほど利用していない可能性が示唆された。質疑では、ハミング文条件に関するいくつかの質問があった。参加者数48名。

【報告：天野 修一（静岡大学）】

〔研究発表〕

「音映像を使った英語文法 項目別例文コーパスによる教授法研究」

田淵 龍二（ミント音声教育研究所）

学習者のレベルに合わせて授業を豊かにすることが教師の役割だとすれば、教材以外の副教材選びが非常に重要である。本研究では、BNC、COCA、SCORe、Sleafの4つのコーパスとGoogleのデモンストレーションを交え、比較検討を行った。BNCとCOCAは量は充実しているが、初級レベルの学生には難しい。SCOReは文脈がつかみやすいため、高校、大学初級に向いており、Sleafは音映像で内容理解がしやすい。参加者数33名。

【報告：西尾 由里（名城大学）】

〔研究発表〕

「学習スタイルと語彙学習ストラテジー・OPIc：Strategyingモデルの有効性検証」

若本 夏美（同志社女子大学）・八木 智弘（NECマネジメントパートナー株式会社）

語彙学習を中心とする授業外の9週間のプロジェクトが語彙能力とスピーキング能力の伸長にどのくらい貢献するのか、学習スタイル（外向性・内向性）、方略トレーニングの理論Strategyingが有効かを検証した。学習者方略の情意・社会的方略が伸び、OPIcに関して、特に初級者の伸びが優位であった。さらに、外向的な性格が優位には働きそうであるが、今後さらに検討する必要がある。参加者数33名。

【報告：西尾 由里（名城大学）】

〔研究発表〕

「携帯情報端末を用いた工学英語語彙学習アプリの効果検証」

笹尾 洋介（豊橋技術科学大学）・河合 和久（豊橋科学技術大学）

工業英語語彙の学習アプリは、従来の紙媒体の学習と比べて、短期的語彙力向上に有効か、さらに長期的語彙力向上に役立つかについて検証を行った。学習アプリを用いたほうが、反復学習を統制しやすく、学習

すべき単語を繰り返しで学習できることから、学習効果が高かったことが明らかにされた。1回の利用時間も15分以下の短時間をもっと多く、使いやすい仕様になっている。参加者数33名。

【報告：西尾 由里（名城大学）】

〔研究発表〕

「自己決定理論とThe L2 Motivational Self Systemの視点から見た英語開講講座における動機づけ」

小島 直子（同志社大学）・八島 智子（関西大学）

発表者のうち八島先生が不参加となり、発表開始直後に小島先生より謝罪が行われていた。タイトルが長いという印象を受けた。質疑応答は3名からあったが、分析が複雑になっている一方で、適切にその分析から結果を導き出しているのかという問いが挙げられていた。今後の研究に期待したいと思います。参加者数41名。

【報告：大山 健一（首都大学東京）】

〔研究発表〕

Investigating the Development of Ideal L2 and L3 Selves: A Longitudinal Interview Study

Takahashi, Chika (Ehime University)

英語による発表のためか、参加者人数が多くなかった。インタビューを分析した研究であったが、ただスライドの文面を読み続けるような発表であるように感じられた。質疑応答は3名からあったが、L2とL3の表記がどのようなことを示しているのかという具体性が弱い点が挙げられていた。タイトルには長期的となっても分析がそれほど長期的ではなかったもので、今後に期待したいと思います。参加者数17名。

【報告：大山 健一（首都大学東京）】

〔研究発表〕

Inside and outside the classroom learning

Tsuda, Hiromi (Meiji University)

英語による発表にも関わらず、参加者が多かったことから、発表内容への関心が高いと思われた。質疑応答は5名からあったが、発表がほぼ時間通りということもあり、多くの情報交換が行われていた。質疑応答には適切に答えていたので、参加者の多くは聞いて良かった発表であると考えられる。更なる今後の研究に期待したいと思います。参加者数26名。

【報告：大山 健一（首都大学東京）】

〔実践報告〕

「高専生を対象としたムードルメール配信小テストの導入と実践」

鞍掛 哲治（鹿児島工業高等専門学校）

高専の生徒の学力は、低下傾向にある。学習習慣の未確立が問題である。このような現状の中、学力向上の方策として、ムードルを活用した「メール配信型小テスト」の実践に取り組んだ。参加者は2年生43人であった。毎日1通ずつ送信し、事後にアンケート調査を行った。10名の学生が回答し、6割の参加者が積極的に取り組めたと回答した。今後の課題として、リンク数の過剰化、リスニング問題、やる気のある生徒への対応などが明らかになった。参加者数12名。

【報告：真崎 克彦（関西大学 非常勤講師）】

〔研究発表〕

「意味伝達を重視した英語シャドーイングの新しい自動評価システムの開発と評価」

山内 豊（東京国際大学）・峯松 信明（東京国際大学）・川村 明美（東京国際大学）・西川 恵（東海大学）・加藤 集平（HOYAサービス株式会社）

コンテンツシャドーイングは、認知的な負荷が高いが、その特徴を生かし作動記憶の効率的利用、言語処理の自動化の促進がなされるため、総合的熟達度を伸張させることができると言われている。一方、シャドーイングの自動評価については、多くの課題があるとされている。しかし、GOP (goodness of pronunciation) を用いた本研究においては、自動評価と手動評価の相関係数は、0.8程度であり、TOEICの得点や韻律との相関も高いことが明らかになった。参加者数43名。

【報告：真崎 克彦（関西大学 非常勤講師）】

〔研究発表〕

「Forumを利用した交流サイトにおいて投稿意欲を喚起・疎外する要因は何か」

松浦 浩子（福島大学）・宮本 節子（兵庫県立大学）・飯野 一彦（群馬工業高等専門学校）

本研究では、学際的なコミュニティの構築を目指して、英語での意見交換システム (TED Discussion) の導入による参加者間のコミュニケーション生成過程の解明を試みた。具体的には、web上で視聴したTEDトーク動画の内容について学生間で英語による意見交換を行わせ、アンケート結果の事後分析、英語語彙及びリスニングによるレベル診断テストを行った。分析により、投稿動機は、教員の指示、トピックへの関心が多く、参加者は、投稿に使用する英語表現に難を感じていることが明らかになった。投稿を阻害する要因としては、英語が難しい、意見が持てない、トピックに関心が無いなどが上げられた。参加者数17名。

【報告：真崎 克彦（関西大学 非常勤講師）】

〔研究発表〕

「C-Testと削除方法：多読指標との関係を中心に」

木下 徹（名古屋大学）・梶浦 真由美（名古屋大学）・高 飛（名古屋大学）

クローズドテストに代わり注目されるCテストで、空所の単語の前半を削除した「逆Cテスト」を用いる方が、産出能力の予測力が相対的に高いことを受け、半年間多読授業を受けた学生が多読関連指標においても相関を示すかを検証した結果が報告された。会場には34名が参加し、空所補完能力の解釈など活発な質疑が行われた。

【報告：野村 和宏（神戸市外国語大学）】

〔研究発表〕

「日本人英語学習者における自動化した明示的知識の役割」

岡田 美鈴（北九州工業高等専門学校）

学習によって得た明示的知識が暗示的知識となる前段階として自動化した明示的知識という段階があるという前提のもと、これらが文法項目ごとに分類可能かどうかについて実験検証を行い、時間的指標によりこれらの分類が可能であったとの報告が行われた。口頭運用能力の測定との関係にも触れられた。参加者数は35名であった。

【報告：野村 和宏（神戸市外国語大学）】

〔研究発表〕

「小学生の英語語彙学習—教材の違いによる学習効果と脳活動—」

中野 秀子（九州共立大学）

小学生が英語語彙学習中に学年や教材の内容によってどのように脳活動が異なるかを、LABNIRSを用いて検証したものである。教材は「既習語のなぞり+音」や「音絵有」が有効であることを始め、さまざまな興味深い事象が報告された。小学生の脳はまだ成長過程であり年齢差や個人差があることも述べられた。加者数は38名であった。

【報告：野村 和宏（神戸市外国語大学）】

賛助会員プレゼンテーション

株式会社桐原書店：

「グローバル人材育成のためのブレンド型英語学習教材」

ピアソン・ジャパン株式会社：

「GSE/Progress—神戸学院大学での実践報告—」

国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部：

「ライティング指導ツール「Criterion」大学・高校における導入事例」

日本データパシフィック株式会社：

「新形式TOEICに対応したe-learningコンテンツの開発」

英語運用能力評価協会：

「英語プレイズメントテスト：14年間の分析と英語力の経年変化」

チエル株式会社：

「CaLaboシリーズ新製品のご紹介」

株式会社成美堂：

「AFPニュースで学ぶ毎月配信型時事英語教材」

株式会社内田洋行：

「主体的な外国語学習を支援するウチダのソリューション」

リアリーイングリッシュ株式会社：

「新形式に対応！初級者に優しいオンラインTOEIC対策教材「KICKOFF FOR THE TOEIC TEST」のご紹介」

懇親会

リーガロイヤルホテル東京

電子システムの簡単ソリューション Part2
ビーコン出席管理システム

では、ビーコンで出席をとります。

簡単

ビーコンとスマホで出席管理!

大講義室に最適!

本システムは、ビーコンとスマートフォンを使って簡単に出席管理ができます。
学生は、最初に専用アプリをダウンロードして情報を登録した後、毎回の授業で出席ボタンを押すだけです。
教員は、出席データを CSV ファイルでダウンロードできるため、Excel だけでなく授業支援システムなどでも利用できます。

お申し込み・お問い合わせ 営業時間 9:00~17:00 (土日祝除く)

電子システム株式会社

電子システム

本社・東海支社 ☎ 052-872-0505

首都圏支社 ☎ 0422-60-5155

8月9日（火）：第3日

公募シンポジウム

「小池コーパス分析が日本の英語教授・学習に示唆するもの—ESL環境下での日本人児童の第2言語習得の記述的研究の再評価—」

小池 生夫（慶應義塾大学・明海大学）・投野 由紀夫（東京外国語大学）・蒲原 順子（福岡大学）

本シンポジウムは日本人児童のESL環境下での英語の習得の2年半の継続採取録音資料の書写の分析をコーパス分析も加えて行ってきた40年以上にわたる研究である。それを通して第2言語習得のメカニズムを解明し、そこから英語の教授・学習への示唆を得た。

発表の第1部ではデータの特徴を小池が説明した。第2部は小池が担当し、ESL環境における5、7、11歳の3人の兄弟妹の2年半にわたる書写データのうち最初の1年分をマニュアルによって音声、形態素、統語、意味構造、コミュニケーションストラテジーの習得過程を分析し、3人に相関が高い習得の順序性が脳内に自律的に広く存在することを仮定した。第3部は投野、蒲原の発表で、2年半分すべての発話データをコーパス化した資料をもとに単語、統語の習得の推移の特徴を明らかにした。このうち、投野は語彙発達、N-gramによる語彙・品詞連鎖の分析による発達時期のクラスタリング、統語構造における前置修飾、後置修飾の名詞句の拡張の習得傾向の分析、Index of Productive Syntaxによる習得のプロセスを紹介し、3人の習得過程に共通性が高いことを仮定した。蒲原は動詞、例えばgiveやmakeなどと文型の関連を中心とした統語構造の発達過程を分析した。

教授・学習への示唆としては自律的な想像、

直観、模倣、創造、及び必要と意欲が原動力になる。見る、聞く、理解、模倣がまず学習に必要。意味から音への連結が学習の第一歩、音連結から単音の習得へ、コミュニケーションでは伝えたい意味、音連結、語、文へと習得が進む、年齢が低い子供や女子は男子より習得が早い。習得は1年でほぼ急激な発達はとまり、その後ゆるやかに発達。統語構造が発達する過程は単純から複雑へ進むが、その順序は子供間で共通点が多く見られる。大量の良質なインプット、自発的な発話練習の機会を豊富に与えることが必要。年齢が上の子供はより高度の言語構造習得に対応力があるだろう。簡単な文で使う動詞を使用してより複雑な文構造をつくる学習法が有効であるなどを紹介した。発表後、興味溢れる質疑応答の機会に恵まれ、知的興奮の雰囲気を楽しめたことを出席者や主催者の皆さんに感謝したい。

【報告：小池 生夫（慶應義塾大学・明海大学）】

研究発表・実践報告

〔研究発表〕

Investigating the Effective Use of Smartphone Apps for Vocabulary Learning: A Comparison with Paper Books

Kaya, Tadayoshi (Gakushuin Women's College)

語彙学習スマートフォンアプリを開発し、学習効果を紙冊子と比較した検証結果が発表された。7つの特徴（spaced repetition algorithmの採用、SNSを活用した協働学習他）を持つアプリを、大学二年112名に2週間使用させた結果、アプリと紙冊子両方を使用したグループが、一方のみのグループよりも成果があることがわかった。参加者数28名。

【報告：今井 裕之（関西大学）】

〔研究発表〕

「辞書インターフェイスが与える影響：スマホとタブレットを比較して」

小山敏子（大阪大谷大学）

同コンテンツの辞書アプリでも、使用機器により検索行動に差が出るか、学習効果は違うか、学習者はどちらの機器を好むかについて検証の結果が発表された。大学生19名（初・中級レベル）の学習活動後のアンケート、語彙再認テストの結果、タブレット使用の方が、検索語数が多くなる一方で、スマホ使用の方が再認率は高いという結果が得られた。参加者数18名。

【報告：今井 裕之（関西大学）】

〔研究発表〕

「どのような学習者が協同学習の望ましいパートナーか：自己の動機づけ要因としての他者」

草薙邦広（広島大学）・福田純也（静岡県立大学）・川口勇作（名古屋大学大学院生）・田村祐（名古屋大学大学院生・日本学術振興会）・後藤亜希（名古屋大学大学院生）

協同学習における動機づけを説明する新しい数理的モデルとそれを検証する大規模な評定実験の結果が報告された。新モデルは、Atkinsonの期待価値理論を参考に、特定状況下の個人間分散と個人内分散を同時に説明する。疑似人物との協同学習を想定した質問紙調査の結果、新モデルは有意に動機づけを説明することがわかった。参加者38名。

【報告：名部井 敏代（関西大学）】

〔研究発表〕

「WBT教材の学習履歴から見える学習者の行動と学習成果」

阪上辰也（広島大学）・鬼田崇作（広島大学）・榎田一路（広島大学）・森田光宏（広島大学）

大学生英語学習者の、webで行うe-Learning教材の授業外自習における学習行動と学習成果が報告された。学習者は、指定された教材を自習し、16回の授業中毎回テストを受けた。webに残る教材の学習履歴から、自習は授業前夜が多く、読解問題の取り組みが貧弱であることがわかった。継続的に学習した学習者にはTOEIC®IPテストでスコアの上昇があった。参加者45名。

【報告：名部井 敏代（関西大学）】

〔研究発表〕

「学生による発音自己評価の検証：通年の指導から得られる学生の評価力」

大塚 朝美（大阪女学院短期大学）・上田 洋子（大阪女学院大学）

通年の音声指導の後、学習者の自己発音評価は教員の評価とどの程度一致をするのか、その一致の度合いを語強勢とイントネーションについて考察。また、アンケート調査によって自己評価を授業に取り入れることに対する学習者の反応にも言及した。フロアからは学習者の自己評価の精度に対する質問があった。参加者11名。

【報告：大塚 朝美（大阪女学院短期大学）】

〔研究発表〕

Using Automatic Speech Recognition Technology to Assist L2 Listeners

Mirzaei, Maryam Sadat (Graduate student, Kyoto University)

ASR (Automatic Speech Recognition) systemにおける音声認識のエラーは、L2学習者の音声認識エラーと共通するところがある。それらを分類し、PSC (Partial and Synchronized Caption) に応用するこ

とで、学習者のリスニング力に応じた教材の作成にも寄与することが示された。フロアからはテクニカルな質問が多数寄せられた。参加者20名。

【報告：大塚 朝美（大阪女学院短期大学）】

〔研究発表〕

「初級英語学習者の聴解に与える発話速度調整の効果」

小屋 多恵子（法政大学）

初級英語学習者が、自身でリスニング時の発話速度を変更した場合に、どのような効果が見られるのかが報告された。発表では、学習者の聴解力だけではなく、心理的側面にも効果があることが報告された。フロア17名の中からは、再現性のための具体的な手続きに関する質問などが寄せられた。

【報告：池田 真生子（関西大学）】

〔研究発表〕

「日本語話者のための英語音声到達速度指標 英語音声教育に関するオンラインアンケート調査結果より」

上斗 晶代（県立広島大学）

本発表では、教員および学生より英語音声教育（自身の発音到達度の認識）に関して実施されたオンラインアンケートの結果をもとに、CEFRの各レベルに合わせた具体的な到達度指標の詳細が提案された。質疑応答では、参加者12名の中から、研究対象となった学部生の英語学習環境などについて、質問がなされた。

【報告：池田 真生子（関西大学）】

〔研究発表〕

An Exploration into Preferred Pedagogical Varieties among Japanese EFL Learners

Saeki, Tatsuya (University of Hawaii)

日本人英語学習者が好む英語変種を、発音・語彙・文法・語用の側面から調べた調査についての報告であった。ハワイ留学中の日本語母語話者6人を対象に実施されたインタビュー調査結果を質的に分析した結果、発音（産出）・語彙・文法ではNS変種が好まれる傾向があるが、語用の面では話者の出身地の文化や習慣が反映された変種が好まれるという結果が印象的であった。参加者数10名。

【報告：中西のりこ（神戸学院大学）】

〔研究発表〕

「児童の英語運用能力と自己評価の関係を探る 2年間の質問紙調査と児童英検を用いて」

物井 尚子（千葉大学）

3つの公立小学校の5、6年生児童を対象に実施された自己評価調査と英検Jr.の結果についての報告がなされた。先行研究が示す通り、児童の自己評価と英語力の間には正の相関が見られた一方で、6年次の英検Jr.成績が3校ともに5年次よりも下がったという思いがけない結果についての考察が示唆に富んだものであった。参加者数17名。

【報告：中西のりこ（神戸学院大学）】

〔研究発表〕

スウェーデンの4-6年生用英語教科書における語彙の量とレベル

入江 公啓（志學館大学）

本発表は、スウェーデンの小学校で使用されている英語教科書の語彙量と語彙レベルを検討したものである。分析結果から、小学校で多くの基本語を扱っていることが示されている。スウェーデンにおける英語力の高さ小学校の英語教育との関係が示唆された研究成果と言えよう。今後、学習指導要領および教育内容を調査することによ

て、英語力の高さの要因が明らかになることが期待される。参加者数12名。

【報告：大久保 雅子（東京大学）】

〔研究発表〕

Webシステムを活用した学習の進度の違いが語彙学習方略に対する意識に与える影響

鈴木 政浩（西武文理大学）・竹口 恵理子（熊本大学大学院生）

本発表は、WebシステムKojiroを活用して語彙学習を積極的に行った学習者が語彙学習方略への意識が高まったかどうか、また、語彙力がついたと実感しているかどうかを調査したものである。Webシステムを活用した学習において達成感から挑戦意欲を高めることが重要であることが示唆されている。

質疑応答では、分析方法や音読との関係、Webシステムを活用した授業方法等に関する質問があり、活発な意見交換がなされた。参加者数13名。

【報告：大久保 雅子（東京大学）】

〔研究発表〕

「和英辞典の記述改善に向けた一提案：日本語オノマトペの場合」

仁科 恭徳（神戸学院大学）

本発表は現行の和英辞典におけるオノマトペの翻訳の問題点を浮き彫りとし、英日両言語に精通したバイリンガルが翻訳および例文作成を行うことの重要性を示したものである。

日本語のオノマトペは英訳が難しいとされているが、このような翻訳が難しい語彙は学習者にとって習得が難しい。本発表は、翻訳という作業を通し、英語教育や日本語教育に大きな示唆を与えてくれるものである。参加者数7名。

【報告：大久保 雅子（東京大学）】

〔研究発表〕

Technology-enhanced Communicative Activities Flight Simulator-Based Information Gap Tasks

Wright, David (Tokai University),

Nakagawa, Hiroshi (Tokai University)

デイビッド・ライト氏より、航空科の学生に施したフライトシミュレーターを活用したシミュレーション型言語教育（Simulation-based language education / SIMBLE）の授業実践の報告があった。インストラクターが直接機体の制御を行ったり制御の指示を出したりしながら普通の言語運用能力で学生に対応することができたこのことなどが、学習者とのコミュニケーションの円滑さにつながり、授業の自信にもつながったとのことであった。参加者数17名。

【報告：久保 岳夫（早稲田実業学校）】

〔研究発表〕

「保健医療専門職者の発信力向上を目指す効果的な英語学習支援方法の模索 MOOCsを用いた自主勉強会での試み」

渥美 陽子（聖隷クリストファー大学）

保健医療分野の研究者を対象とした英語学習の支援のため、MOOCsを活用した自主勉強会の実践報告があった。参加者の振り返り記述などから、目的別英語（ESP）を学ぶ必要性を共有できる仲間の中で交流し励ましあうことが、継続的な学習が可能になったとの報告がなされた。今後の課題として医師の参加の必要性などが質問者から提案された。参加者数10名。

【報告：久保 岳夫（早稲田実業学校）】

〔研究発表〕

「日本人高校生へのライティング指導が抱える問題：フィードバックをどう行うか」

小見山 和栄 (京都外国語大学 大学院生)

日本人高校生を対象とした、指導者による文法訂正のフィードバックのない継続的な自由英作文指導の効果を検証した実践報告がなされた。指導の中に教師からの文法訂正がなくても、英訳練習よりも自由英作文のほうが文法定着力に効果がある可能性があることが示された。指導者による文法訂正の有無よりも、読み手の有無や語数の評価などが書き手のモチベーションを左右しうることが示唆された。参加者数27名。

【報告：久保 岳夫 (早稲田実業学校)】

〔研究発表〕

「英語音声ストレス知覚における超音節特徴と分節的特徴の関係—英語母語話者と日本語母語話者の比較—」

江口 小夜子 (神戸大学大学院・国際電気通信基礎技術研究所 (ATR))

江口先生の発表は英語母語話者と日本人英語学習者を実験参加者とし、英語音声のストレス位置の知覚の違いを探る研究であった。私が音声専門とせず司会者として申し訳ない気持ちで発表を伺ったが、この発表は問題点と研究手法が明確で、専門以外の研究者にも分かりやすいものであった。このような基礎研究にあたる実験の発表は教育への応用研究と同様に重視されるべきである。参加者数30名。

【報告：鎌倉 義士 (愛知大学)】

〔研究発表〕

「英語授業と授業外の英語活動をつなげるオンライン英会話の影響」

鬼頭 和也 (東海大学)

鬼頭先生の発表は昨今学生の間でも盛んに利用されているオンライン英会話をどのように授業内の指導と関連付けるかという現場の教員にはとても興味深い内容であった。私が所属する英語学科の学生でも教室内の

英語学習では練習量が足りないと感じる。そこでオンライン英会話もひとつの学習法として勧めるが、そこで系統だった指導が行われているかは疑わしい。この研究では利用学生から印象評価を調べるアンケートを行い、統計的手法を用いてキーワードを抽出した。そこからモチベーションの先行研究を交え、この研究の重要性を説く良い発表であった。参加者数30名。

【報告：鎌倉 義士 (愛知大学)】

〔研究発表〕

「自動音声分析システムに基づく英語発音訓練の導入—学習者の発話・発音の改善に向けて—」

保田 幸子 (九州大学)・沼田 剛史 (G-TELP 日本事務局)

この発表は保田先生によるアンケートとスピーキングテスト結果の分析と、その問題を解決すべく使用された発音自動評価システムの紹介をG-TELP日本事務局沼田さんによって行われる二部構成で行われた。発音自動評価システムは英会話のトレーニングアプリとして開発され、教室外でもスマートフォンで使用可能である。この有用なアプリを使用して日本人大学生の発音やその意識がどのように変化したかを詳しく伺いたかったが、時間の都合で結果の紹介が駆け足になり残念であった。より詳しく聞いてみたい発表であった。参加者数30名。

【報告：鎌倉 義士 (愛知大学)】

ポスター・セッション

「既知語と未知語を可視化するeポートフォリオLexinoteの開発と授業実践」

田中 洋也 (北海学園大学)・大西 昭夫 (株式会社VERSION2)・浦野 研 (北海学園大学)

「社会的・継時的比較から見たビデオ映像

活用の提案」

岡田 靖子 (清泉女子大学)

「セルフアクセスセンターの効率化と学習促進を目指したシステムの開発」

茅野 潤一郎 (新潟県立大学) ・ 初野 拓巳 (株式会社ウィズダム)

Development of a Multimedia Spanish Language Learning Application: based on ADDIE model and Unity 3D platform

Fuyuno, Miharu (Kyushu University),
Blanco Cortes, Laura Maria (Kyushu University, Graduate Student)

「映画と物語を用いた英語学習—英文を「読む」動機付けにつながるかという観点から—」

滝村 裕子 (東京大学大学院生)

「オリジナルe-ラーニングプログラム Vocabulary Managerの有効性の検証」

岡崎 弘信 (秋田県立大学) ・ 橋本 信一 (電気通信大学) ・ 福田 衣里 (中国学園大学) ・ 木戸 和彦 (環太平洋大学) ・ 江原 智子 (環太平洋大学)

「語学教育設備の更新と改良の実践：理工系ESP教育の3年目を新たな視座から」

加藤鉄生 (中部大学)

「英語コミュニケーション能力向上のための活動：期待と実感」

半田 純子 (青山学院大学 ヒューマン・イノベーション研究センター) ・ 坂本美枝 (サイバー大学)

「外国語学習での視覚情報の効果」

李相穆 (九州大学)

「英語嫌いの高専学生の英語力向上をめざす試み—多読の読み方を考える—」

水野知津子 (香川高等専門学校)

「テキスト分析システムを活用した大学英語ライティング教科書の語彙分析」

飯島 優雅 (獨協大学) ・ 堀江 郁美 (獨協大学)

Discrepancies between Language Learners and Teacher Beliefs

Funada, Natsuno (The University of Tokyo, Graduate student)

Japanese EFL Students' Perceptions of Non-native Varieties of English Pronunciation

Minami, Sayori (Ritsumeikan University)

賛助会員プレゼンテーション

株式会社レアジョブ：

「オンライン英会話の実践事例—授業内/留学準備における活用—」

NECマネジメントパートナー株式会社：

「コミュニケーションテスト活用の実践報告—Pre/Post評価に着目して—」

パネルディスカッション

「協同学習・協働学習の現在と未来：アクティブ・ラーニングの活性化に向けて」

パネリスト：向後 秀明 (文部科学省) ・ 伏野 久美子 (東京経済大学) ・ 大場 浩正 (上越教育大学) ・ 山西 博之 (関西大学)

現在の日本ではアクティブ・ラーニングが注目されているが、その理論や実践的な指導法に関しては未だ不明瞭な部分が多い。このアクティブ・ラーニングを具現化する「協同学習・協働学習」に焦点を当て、議論が行われた。

「共同学習」と「協働学習」の2つの用語には微妙な差異が存在する。「共同学習」とは、互いを尊重しあい、共通目標を達成する過程で個人が責任を平等に果たしながら、自他の学習を促進する学習形態である。一方、「協働学習」とは、協働活動を利用して個人の自律性を高めることを目標にし

た学習形態である。活動への平等な参加は強調されない。しかし、重要なのは他者と協力しつつ、自律的に学習できるようになることであり、用語の差には大きな意味は無いと考えられる。

「共同・協働」を英語の授業内で実践するのであれば、学習者間の信頼関係を促進し、失敗を恐れず英語で意思疎通を図ろうとする支援的な環境を作る必要がある。しかし、教師にも理念の理解と指導技術の向上が求められ、時間がかかることは認めざるを得ない。しかし、教師も学習者と共に成長すべきであり、それだけのメリットが共同学習にはある。

協働学習については様々な研究がなされている。例えば、協働的なライティング活動は、L2の使用、及びL2アウトプットの質に正の効果があることが示唆されてきた。しかし、協働学習がどう認識されているのかについては研究方法が確立されたとは言い難い。そのため、「学習効果」「学習効果への懸念」「協働の楽しさ」という3つの尺度からなる認識についての質問紙が作成され、検証が行われた。協働的ライティング活動に関する研究の今後の発展が期待される。

アクティブ・ラーニングについては、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の3つ視点が中央教育審議会から提言されている。大切なのはこれらのアクティブ・ラーニング的視点を持って授業を改善していくことであり、方法や型の在り方を探ることではない。今後は、これらの視点を元に外国語教育においても評価の在り方や教材の改善などが求められる。

【報告：今野勝幸（静岡理工科大学）】

閉会行事

司会：奥 聡一郎（大会事務局長 関東学院大

学)

挨拶：高橋 美由紀（中部支部支部長 愛知教育大学)

2016年3月31日

LET2015年度 本部事業報告

4月	賛助会員募集、HP バナー広告募集実施（以下、随時継続） 学会HP、及びML更新作業（以下、随時） 学会賞（事前審査）選考委員会開催（メール会議） 法人化検討委員会（随時）	メルマガ123号発行
5月	学会賞選考委員会開催（メール会議）	メルマガ124号発行
6月	学会賞選考委員会開催（メール会議） LET学会賞候補者資料送付（学会賞選考委員へ） 理事会に向けて支部提案事項、報告文書送付依頼 本部会計（2014年度分）監査実施	メルマガ125号発行
7月	学会賞受賞候補者の承認を理事会に依頼（メール稟議） 学会賞賞状作成	メルマガ126号発行
8月	LET全国大会（2015年度 第55回 全国研究大会）開催 （千里ライフサイエンスセンター）8/4-8/6 機関誌編集委員会・支部長連絡会・理事会開催 8/4 全国総会 8/5 理事会議事録作成 機関誌53号投稿申込締切 8/31 NEWSLETTER No.96 原稿募集開始、広告依頼 FLEAT 6th 8/11-8/15	メルマガ127号発行
9月	理事会議事録発行	メルマガ128号発行
10月		メルマガ129号発行
11月	機関誌53号応募論文原稿提出	メルマガ130号発行
12月	NEWSLETTER No.96 発行	メルマガ131号発行
1月	会長・副会長会議開催 1/24（大阪ガーデンパレス）	メルマガ132号発行
2月	学会賞候補者推薦依頼（各理事へ）	メルマガ133号発行
3月	機関誌52号発行 学会賞候補者推薦締切・候補者資料送付準備を推薦者へ依頼	メルマガ134号発行

外国語教育メディア学会(LET)本部 2015年度決算報告

【収入の部】

費目	予算	決算	備考	
前年度繰越金	1,616,846	1,616,846		
本部事業基金	1,600,000	1,600,000		
賛助会費	2,250,000	2,200,000	@50,000*44社	
一般会費	1,200,000	1,213,265	2015年度本部納付金(LET関東支部)	483,612
			2015年度本部納付金(LET中部支部)	160,200
			2015年度本部納付金(LET関西支部)	453,578
			2015年度本部納付金(LET九州・沖縄支部)	115,875
広告代	100,000	50,000	Newsletter No.96 広告掲載料@20,000*1 パナー広告料(3月末を契約終了とし、広告掲載期間が半年以上1年未満)@30,000*1	
雑収入	1,000	659	利息・口座解約費	
合計	6,767,846	6,680,770		

【支出の部】

費目	予算	決算	備考	
印刷費	2,090,000	2,649,489	LET機関誌52号 1,550部 印刷代 1,829,000円, 発送用封筒 104,600円, 宛名シール作成, 封入 発送料 236,640円, 消費税額 173,619円	2,343,859
			Newsletter No.96 1,800部	153,900
			LET賞状, 2014年度理事会議案書印刷費等	120,960
			全国研究大会 総会資料 印刷費, 会長副会長会議議案書印刷費	30,770
会議費	50,000	84,396	会長・副会長会議開催に関する経費(会議室使用料)等	
通信費	50,000	58,981	振込料, 賛助会員・理事宛各種郵送料等	
ネットワーク関係費	700,000	537,840	サーバー管理費用とSSLサーバー利用料(2015年3月~2016年3月)	
宿泊・交通費	500,000	577,820	会長・副会長会議交通費, FLEAT VIへの公務出張(海外出張を含む)の交通費補助	
事務費	200,000	195,201	言語系学会連合2015年度会費40,000円, 教育関連学会連合2015年度年会費 10,000円, 事務用品費等	
外部業務委託費	800,000	607,869	2015年度全国大会業務委託費, 及び保管料(2015年3月~2016年3月)	
人件費	50,000	0	本部事務局業務補助アルバイト料(発送)	
全国研究大会開催費	600,000	600,000	2016年度全国大会実行委員会事務局(関東支部)へ振込。理事会・各種委員会開催費も含む。	
国際交流委員会費	100,000	0		
本部事業費	1,300,000	30,263	LET新しい会計制度の導入のための会議・交通費, および法人化に備えての積立金	
予備費	327,846	0		
次年度繰越金		1,338,911	内, 1,000,000円は次年度の本部事業基金に充当	
合計	6,767,846	6,680,770		

以上の通り報告します。

2016年 7月 6日

本部事務局長

佐々木 政二郎 印

上記内容につき相違ないことを確認しました。

2016年 6月 29日

会計監査

植木 美千子 印

2016年 7月 8日

会計監査

氏木 道人 印

2016年度 本部事業計画

4月	賛助会員募集 理事・支部役員・各種委員名簿受付 学会HP、ML更新作業（以下随時） 学会賞（事前審査）・選考委員会開催（メール会議） 会計委員・会計事務所打ち合わせ（以下随時）	メルマガ135号発行
5月	学会賞選考委員会開催（メール会議） 機関誌52号会員宛発送	メルマガ136号発行
6月	学会賞選考委員会開催（メール会議） 本部会計（2015年度分）監査実施 機関誌電子版J-STAGE搭載・CiNIIより移行申請手続き 学会賞受賞候補者の承認を理事会に依頼（メール稟議）	メルマガ137号発行
7月	機関誌53号発行・会員宛発送 Newsletter No.97原稿募集開始 学会賞受賞者決定・広報・賞状作成	メルマガ138号発行
8月	LET全国大会（2016年度第56回全国研究大会）開催 （早稲田大学・8/7～9） 機関誌編集委員会・支部長連絡会・理事会開催 8/7 全国総会 8/8 理事会議事録作成 機関誌54号投稿申込締切 8/31 Newsletter No.96広告募集	メルマガ139号発行
9月	理事会議事録発行 LETブログサイト整備	メルマガ140号発行
10月		LET blog 141号発行
11月	機関誌54号応募論文提出締切 11/30	LET blog 142号発行
12月	Newsletter No.97発行 機関誌編集委員会・応募論文査読者決定	LET blog 143号発行
1月	機関誌査読依頼 会長・副会長会議開催	LET blog 144号発行
2月	学会賞候補者推薦依頼 機関誌54号応募論文再審査原稿提出	LET blog 145号発行
3月	機関誌54号応募論文結果通知 学会賞候補者推薦締切・候補者資料収集準備	LET blog 146号発行

外国語教育メディア学会(LET)本部 2016年度予算

2016年4月1日

【収入の部】

費 目	内 訳	金 額
前年度繰越金		338,911
本部事業基金	前年度からの繰越予算	1,000,000
賛助会費	40社*@50,000	2,000,000
一般会費	前年度各支部会費収入*0.15	1,200,000
広告代	NEWSLETTER 97号	40,000
	バナー広告 2社	60,000
雑収入	銀行利息など	1,000
合 計		4,639,911

【支出の部】

費 目	内 訳	金 額
印刷費	機関誌53号(各支部会員への送料込み)	778,862
	NEWSLETTER 97号	147,600
	会議資料コピー代	50,000
	学会賞の賞状(額縁代を含む)	10,000
会議費	会長・副会長会議 会議室使用料など	110,000
通信費	郵送料・振込料	50,000
ネットワーク関係費	サーバ管理・業務委託料、IDシステム改良費用(ドメイン維持料含む)	600,000
宿泊・交通費	支部長連絡会、幹事会、IALLTなどの公務出張(海外出張を含む)の交通費補助	300,000
事務費	事務用品費(教育系、言語系学会組織との連携費を含む)	200,000
外部業務委託費	業務委託費、及び保管料	1,200,000
人件費	事務局業務アルバイト料など	50,000
全国研究大会開催費	担当支部への支払い(理事会、各種委員会開催費等を含む)	700,000
国際交流委員会費	IALLTなどとの連携に関わる費用	100,000
本部事業費	理事会で承認された事業推進費として(法人化に備えての積立金を含む)	300,000
予備費		43,449
合 計		4,639,911

外国語教育メディア学会 (LET) 本部

NEWSLETTER No. 97

発行日 2017年1月13日

発行所 外国語教育メディア学会 (LET)

会長 柳 善和

印刷所 不二印刷工業株式会社

〒452-0822 名古屋市西区中小田井4-147

電話 (052) 504-9461